

10年ほど前だろうか。若いころから一緒に詩を書いてきたAさんが、「本の整理をしたいとおもって高知県立図書館と高知市民図書館に引き取ってもらえる本があれば引き取ってもらいたいと声をかけたが、両館とも書庫が満杯で受け入れることはできないと断られた」と言っていて、そのあとしばらくして亡くなったのだが、彼の本はどうなったんだらう。彼はほくより読書家で、たぶんほんの10倍や20倍は本を持っていたとおもう。部屋のほとんどを本が占めていて（古典や、近代小説が多かった記憶がある）、彼の家に行くたびにその分量に圧倒されていた。彼の死後それらの本はどうなったのかわからない。まあ、個人の蔵書本ぐらいいは図書館には完備されているだろうから、受け入れても重複するとおもったのだらう。で、いまからおもえば大きい図書館ではなく小さな図書館に声をかけていけば受け入れてくれたかもしれない。

書庫が満杯だという県立図書館と市民図書館が合体して7月24日に新しい図書館ができた。賑々しいオープニングが報じられた。

それからひと月も経たない8月17日の高知新聞に『県大 蔵書3万8千冊焼却』県大焚書 知の機会奪う』というセンサーショナルな見出しが載った。『高知県立大学が焚書』という記事だった。

「焚書」といってすぐに思いおこすのは「秦の始皇帝」と「ナチス・ドイツ」、あるいは文化大革命時の毛沢東による焚書とか、SF小説を取りあげると、レイ・ブラッドベリの「華氏451なるの」だろうか、それにしても一冊ナンボではなく目方でナンボというのは、いかに寄贈本が書籍としての値打ちがなかったかを物語っている。

そういうふうには紙媒体は嵩張る。にっちもさっちもいかなくなる。個人でも公的な施設でも同じだろう。国会図書館は紙媒体をデジタル化してそれを保存していると聞く。そうすると、紙媒体としての「うつくしさ」がなくなる。たぶんそんなことは承知で、それでもそうせざるを得ない状態なのだろう。

高知県立大学の場合はすこし事情が違って、旧図書館よりも狭い新図書館をつくったということだ。そのことは、それなりの事情があったらうから外部がどうのこうのといってもはじまらないが、そのことを理由に「棚に入らなかった本を焼却」してしまった。

焼却以外のやり方があったのではないか、ということが高知新聞の天野弘幹記者が10回にわたり『灰まで焼却』と題した検証記事を書いている。焼却事件だけではなく、高知県には図書館のない市町村が10町村もある（そこでは公民館の図書室が図書館の代わりをはたしているとか）、という取材も入っていて、そうとう力の入った取材記事だった。

焼却したいちばんの理由は、「県大の蔵書印がある本」は外部には出せない、ということだったらしい。天野さんの取材はそれに異議を申し立てていて、国立の高知大学では毎秋リユースセールをやってるし、高知市民図書館は小学校や児童クラブほかに、県立図書館も県下の市町村図書館に無償提供している

度」だろうが、高知県立大学の場合、そういう思想的な背景があったわけではなく、新図書館を建築したのだが旧図書館よりも小さいため、収納できない本3万8千冊を、そのなかには戦前の郷土関係の本をはじめ古書店でも入手が難しい絶版本、高値で取引されている本なども含まれていた、ということ、それらのリストも掲載されていたが、それらの本を、高知市のゴミ焼却場で焼却したということだ。いってみれば「いらなくなったから燃やした」ということだ。

たしかに紙媒体はかさばる。ある程度溜まってくるとどうしようもなくなくなる。にっちもさっちもいかなくなる。ほくの場合、本棚に収まりきれなくて、押入に入れていて押入の底が抜けそうになって女房に怒られた、とか、廊下に積んでいて白アリに喰われてしまったとか、にっちもさっちもいかななくなったことがあった。

かの草森紳一は自宅トイレ付近まで本を積み上げ、トイレに入っている最中、本が崩れて閉じこめられてしまった話を書いていた。彼は月に150冊の本を買っていたという伝説の残る人だったが、それはどうかとおもう。日に5冊は読まなくてはならない勘定になる（廣松渉は一日に700ページ読んだといわれている怪物だったが、それでも単行本換算で3冊くらいだろうか）。で、4万冊の本に埋もれるようにして70歳で死んだ。いい一生だっただろう。

江藤淳は何か月かに一回、懇意にしている古本屋に来てもらって目方で書籍を処分した、となにかの本に書いていた。彼ほどの大物になると寄贈本が多くてにっちもさっちもいかなく

という例を挙げている。蔵書印入りでも流通しているということだ。

後日の検証記事のなかに（9月24日付）、全国の公立大学（国立ではない）90校へのアンケートを実施して58校から回答を得た結果が載っていた。

58校のうち37校が除却本を最終処分する前に校内外への譲渡機会を設け、大半の大学が無償で、有償の大学5校でも100円とか50円とかの設定で、再活用していた。また古書店へ売却した大学が5校、他の図書館へ譲渡という大学が7校あり、他の図書館にだけ譲渡しているという1校を合わせて、38校が処分本を再活用しているらしい。それぞれの学校でいろいろ工夫しているようだが、この結果を見ると回答を得ない大学を含め再活用していない大学が相当数あるので、高知県立大学としては、うちだけじゃない、とホッとしているかもしれない。

この焼却事件は県外の新聞でも紹介されたらしく、鳥取県の年若い友人からメールがあった。鳥取県立図書館はさまざま理由で廃棄処分になった本を県民に無償提供しているとのこと。蔵原伸二郎の『岩魚』や現代詩手帖のバックナンバーや『西一知全詩集』などを手に入れたらしい。手に入れた彼はラッキーだったが、蔵原伸二郎の『岩魚』や西さんの全詩集が鳥取県立図書館の蔵書から弾きだされたのは残念な気持ちはあるが、当の西さんは「しかたないなあ」と、あの独特の自嘲気味の苦笑いをしていることだろう。

しかし県大の図書館運営責任者（総合情報センター長という

看護学部教授)は繰り返し、県大の蔵書印のある本は外に出せないの一点張りだ。連載中何度もその言葉がでてきた。

もう古い話になるので、いまさら蒸し返すな、と高知市民図書館はいうかもしれないが、その市民図書館は県立図書館と合併して『オーテピア高知図書館』とかいう名前に衣更えしてしまっただけだろうか、とちよつとむかしの話を。

詩の新人賞であるH氏賞受賞詩集の展示会をしたいので、多くの持っているB氏の詩集を貸してくれないかと高知市民図書館から依頼があったので、拒むことでもなく貸した。で、展示期間と聞いていた3カ月をすぎても返してくれないので問い合わせると、展示中に汚れたのでいま汚れを除去している、と言われた。本の汚れを取り除くことができるのかとなんとなく疑問はあったのだが、まあ専門家が言っているのだ、本の汚れも取り除けるのだろう、とおもった。しかし、それからひと月経っても返却してくれないのでふたたび問い合わせると、汚れを取っているからもうすこし待ってくれ、と同じ返事。で、またひと月ほど経ったがウンともスンとも言ってくないので問い合わせると、もうすこし待ってくれ、と繰り返すばかりで要領を得なかった。それはおかしいじゃないか、と問い詰めると、実は係の者が間違つて市民図書館の蔵書印を押してしまつた、ということだった。

作者や出版社に問い合わせたが在庫がなく、職員が東京へ出張するたびに神田の古本店を探しているがどうしても手に入らない、ということだった。じゃ、展示中に汚れたというのは嘘

気持ちが悪先したのである。

県大の焼却事件検証の連載記事のなかで天野さんがずうっと問いかけているのは「再利用の発想はなかったのか」ということだ。取材した相手は図書館運営責任者という総合情報センター長(看護学部教授)。

現場の意向として売却する案も出たらしいが、「大学として『資産』から外したものを売り、その売り上げを『資産』に入れるのはどうなんだろうか、と財務部署から指摘があり、それに事務処理のこともあり」とここでも「お役所仕事」的な発想がみられる。3万8千冊の本は、売買すると財務手続きの疑義が生じるために焼却したといっている。たぶんそれらの手続きや事務処理が、面倒だったのだろう。

他の公立施設や学校などに打診はしなかったのか、という問いには、「除却するものだから新鮮な本ではないから打診しても、欲しいと言ってくれる声があるかどうかかわからないから打診しなかった」らしい。これも、問い合わせることが、面倒くさい」と言っているだけだ。連載の8回目に紹介されている仁淀村公民館の図書室は「過疎のため学校が廃校になるので図書室の本がもつたたくなく、ここに集めた。県立図書館が除却した本をもらうなどして掻き集めています」といっている。打診したら喜んでもらうてくれたはずだ。

焼却する前に教職員に「提供」を打診したが、学生には打診しなかったという。で、責任者は「学生にタダであげちゃうの?」と、学生になんかタダでやる筋合いはない、と学生を見

だつたのか、と訊くと、蔵書印を押したので汚れた、と言われた。こういうのを詭弁という。その瞬間、ムカツときた。

しかしまあ、間違つて押したのは仕方がないから、この蔵書印は間違いない、と一筆書いて館長の印鑑でも押してくれればいい、と言うと、市民図書館の蔵書印のはいった本を外に出すことはできない、と言われた。出すことはできない、と言われても、多くの本だし、間違いを訂正するだけだからいいじゃないか、とおもつて交渉したが、どうしても蔵書印のある本は外に出せない、の一点張りだった。このあたりは今回の県大の担当者と同じ言い分だが、どうして出せないのかいまだにわからない。間違えたのは市民図書館なのだから。間違いを訂正すればいいだけのことである。

で、結局は、なんとか探し出して、東京の著者のところまで出向いて、ほく宛のサインをもらつてきて、返却してくれた(ほくが貸した本には、ほくの名と著者のサインがあつたから)。貸してから一年以上が経っていた。

それぐらい経つとばかばかしくなるもので、返却してきた係の人に、市民図書館で欲しい本があつたら持つていつて、と何冊かの本を寄贈した、そんなことがあつた。まだ、ネットで古本が買える時代ではなかつたので、神田の古本屋を一冊の本、それも流通することのきわめてすくない詩集という分野の本を求めて右往左往した職員の方はご苦労なことだったが、訂正印をつけて返却してくればそれですんだ話だつたとおもう。

ひと言でいつてしまえば「お役所仕事」だろう。自分たちのミスを外に出すことなく処理してしまいたい、そんな保身の

下した発言を平然としているが、焼却するよりはタダであげたほうがいいのでは、と普通おもうのだが(後で紹介する工科大の図書館長はタダであげると言っている)。まあこの人は、教授としてふんぞりかえる性格の人なんだろう。

今回の焼却のおきた県大永国寺キャンパスは「知の拠点」をうたつて、県立大学、短期大学、工科大学の公立三校が利用する形を取つていて、新しい図書館には工科大からの図書1万2千冊が持ち込まれていた。では工科大の図書館は1万2千冊空いたのだから工科大に話は持ちかけたかという問いには「工科大へ相談するという考えは私にはピンときません。なぜかというとうと大学が違ふんです。違う大学に持つていく、そういう発想はなかつた」との答え。ナワバリ意識?とおもうのだが、ここもたぶん、工科大に声をかけるのが面倒だったのだろう。それとも工科大に「いらん」と断られたとき、自尊心が傷つくとおもつたのだろうか。

では工科大からきた1万2千冊はどう説明すればいいのだろうか。違う大学の本はなんの文句も言わずに受け入れても、自分ところの本は誰の助けを借りることもなく自己処理してしまう、というマゾ的な発想はどこからきたのだろうか。いやいや、工科大の本を受け入れなければ1万2千冊の本は助かつたのだから、焼却された本にしてみればこの教授はサド的な要素も持っていることになる。

その話を聞いた工科大の図書館の館長は、「ありえない」と絶句し「どうしたんだろう、仲が悪かつたとは思わなければ」と困惑していた、と記事の中にあつた。そして、「私たち

は売らない。たとえば何冊も売ってやっとな千円手に入るとして、私は千円を大学資産に増やすぐらいだったら学生さんや地元の方に配る。そのほうが現金より絶対に価値がある」と。

まあ、焼却した理由はいろいろあるのだが、基本的にはこの大学の人たち、司書も含めて、本が大切、という気持ちで薄かったのだらう。

人にはそれぞれ大切なものがある。他人から見ても滑稽なものでもその人にとってはかけがえのないものもある。だから、本をそんなに大切だとおもわない人がいてもそれはそれでしかないだらう。ところが、事件のおきた場所が「大学」で、それも「知の拠点」などとうたっていて、大学にこそ「知」はあるのだと自負をしていたのだから始末が悪い。そこに司書も関与していたのだから、ますますタチが悪く、大学に「知」はない、ということ暴露してしまったようなものだ。もともと「本だけが知ではない」とおもっているかもしれないが、本も「知」の一部分であることは誰も否定しないだらう。(もともと、この「知」というおもはゆい言葉、好きではないのだが。本は本であるだけの存在で、「知」などという権威主義的な冠をかぶせたくはない。本は食事や運動と同じで、人のこころやからだをつくるものでしかない。ましてや本が「文化」などというたわいごと」なども好きではない)。

この連載をとおして見えてきたことは、運営責任者と、本の直接の担当者である司書も含め、「大学」という、大学以外の

最初に書いたように紙媒体は高張る。場所を塞ぐ。だからデジタル化しようとするところも出てくるが、紙媒体には紙媒体のうつくしきがある。デジタルにはうつくしきがない。

とはいっても、いつまでも本を持ちつづけることはできない。ほくも溜まる一方である。最近はずネットでも新刊本が、手数料・送料なしで手に入るからついつい買ってしまう(高知の書店にはほしい本がほとんどない)。ついでに、古本も買ってしまう。こちらは手数料と送料がかかって、安い本一冊を買おうと手数料+送料のほうが高くなることもある、それでも古本でないという手に入らない本がたくさんある。で、どんどん溜まる。

だから、数年に一度、古本屋に売っている。一年半ほど前に転居したのだが、そのときおもいきって段ボール箱6個分処分した。もつとも、書き込みやマーカーを入れる癖があるから、そういう本は引き取ってくれないが、書き込みをしていない本はそんなふうにして古本屋に売っている。

それでも手放せない本はたくさんある。10代から20代にかけて集めた、ル・クレジオやロブグリエ、サロート、ビュートルなど、あるいは、女房が大学の卒論のテーマにしていたので、その当時一緒に読んだJ・ポールドウインの書籍など、若いころ熱中した小説などは、もう二度と読まないとおもおうのだが、処分してしまつたら二度と手に入らないのではないかと思ひ、「読まないだらうになあ」とおもいながらも、手放せない。たぶん死ぬまで古本屋に売ることはないだらうし、だれかにやるということもないだらう。状態のいい本もあるが、本によって

者から見たらどうってことはない面子のために3万8千冊が焼却されたということだ。運営責任者は言っている。

——図書館の狭隘化の問題は昔からあった。まあチャンスだとやらねばならないとおもつたわけです。

——図書館が焼却しますと決めたわけじゃなく、大学としてそういう方針をとつたということ。

——(現在ほとんど残っていない本を焼却していることは)今初めて知りました。私が判断したわけじゃない。しかるべきシステムを作つて判断しました。

今回は焼却のチャンスだった。図書館ではなく大学というシステムが焼却した。自分は一応その責任者ではあるが、どんな本を燃やしたのかはまったく知らない。そんな無責任な発言ばかりで唾然とするしかないが、極めつけは、今後出てくる大学の除籍本は「心配されているような、焼却処分にはならないと思いますよ、今後は」と悪びれない物言いである。活字として載っているのだから言葉のニュアンスがわからないが、ここには、「今回のことは学内の手順を踏んでいるのだから、私たちにはなんの落ち度もないとおもっているが、あなた方が勝手に心配している」。でも、次からはもうあなたたちが心配するようなことはないでしょう。今回のことはもうすんだことだから、すんだことを心配してはじまらない。もう焼却することはないから心配しなくてもいいですよ。もともと私たちはなんの心配もなかつたのですから。さあ、取材はこれぐらいにしましょう」そんな悪びれのなさが行間に滲んでいる嫌な答えだった。

は、紙が黄色く変色し臭いがあつたり、なかには背文字が剥がれている本もあるし、糸が切れているものもある。だから、共に墓に入るべきものかもしれないとおもっている。

先日、ブックオフという全国チェーンの高須店というところへ行つたら、本誌の西川宏さんが「水田安則」名義で発行した詩集が二冊本棚に並んでいた。誰が持ち込んだらうか、買ってくれる人がいるだらうか、としみじみと背表紙を見た。また半年ぐらいしたら行つてみようとおもう。さて、売れているか、残っているか。(楽しんでるよううで、西川さん、ごめん)

形あるものはかならず滅びる。本もいずれゴミとして焼却されるだらう。それでも形あるうちは、いらなくなつた本は古本屋に売るか、欲しい人にやるのがいいと思う。もつとも、誰も欲しくないという本もあるのだらうか。

新聞社に勤めている四十年来の友人が、もうそろそろ新聞社を辞めなければならぬので机を整理していたら鈴木志郎郎の詩集やエッセイ集が出てきたがいらぬか、というので、もらつた。どつさり持つてきてくれた。お返しに小説本を何冊か持つて帰つてもらつた、読んだら古本屋に売つてくれと言つて。そんなふうに戻し回しするのはいいことだらうと思ふ。

ほくは、死んだら近くの古本屋に売つてほしいと家族に頼んであるが、今度の連載にでてきたような、図書館がなく公民館の図書室がその代わりをしていて、予算もなく不自由しているところがあれば、そういうところへ持ち込むのもいいかなとおもつたりしたが、ほくの持つている本など興味を持つて読ん

でくれそうな人はすくないだろうし、持ち込んでも迷惑かけるかな、などとおもったりもする。それでも、もしかすると、山深い公民館の図書室で、山尾悠子の『飛ぶ孔雀』や赤坂憲雄の『性食考』などを誰かが手にとってくれるかもしれない、と夢想すると、それは、死後の愉しみになるかもしれない、などとおもってみたりするのだが。

などと県大の焼却をとっかかりにつまらないことを書いてきたが、天野さんの記事は、従来の焚書は権力という中心があったのだが、今回の県立大学の焚書は中心のないあいまいなものだった。だからこそ、権力の焚書よりも丁寧に検証しなければならぬ、と、そういうことを最終回の10回目のメモの部分で書いていたので、ここに転載します。ちよつと長いですが。

——アメリカの小説家レイ・ブラッドベリの「華氏451度」(1953年)は、読書を禁じ、密告を奨励する監視社会で、本を燃やす役人モンターゲが主人公だ。彼は自分の仕事に疑いを持たず、こう言う。「おもしろい仕事さ。月曜には、エドナ・ミレーを焼く。水曜には、ホイットマン。金曜にはフォークナー。みんな焼いて、灰にしてしまう。灰まで焼けというのが、ぼくたちの職務規程なんだ」(75年、ハヤカワ文庫版、宇野利泰訳)

高知県立大はフォークナーを燃やし、フランクルの「夜と霧」を焼き、レヴィ・ストロースの「野生の思考」を炎に投じ、ガルスシアマルケスの「百年の孤独」を灰にした。

それは国家や特定の権力者の強い意志で行われたものではな

い。明確な中心核を持たない、ぼんやりした無色透明のジェルのようなものだ。議論をいとい、思考を重ねることなく、人々の小さないびつな遠慮や言い訳、忖度、諦めなどを寄せ集めながら、作業進捗にはある種の生真面目さをまとい、灰まで焼く結果に到達した。

モンターゲがやがて社会に疑問を持つようになったのはふとしたことで本を読んだのがきっかけだった。高知の3万8千冊焼却は、人々が自分たちの社会について考えることにつながるだろうか。

高知県立大は今回の件を検証するという。差し当たってその過程が高知の知的水準の一つを示すことになる。——